



佐藤由巳子

(前川國男元・秘書
佐藤由巳子プランニングオフィス主宰)

人間・前川國男を語る

2013年10月26日 / 東京藝術大学 美術学部中央棟2階 第3講義室

最晩年、3年間前川國男の秘書をしていました佐藤由巳子です。今日は前川先生が出てきて「余計なことをしゃべるんじゃないぞ」と言われそうですが、根が正直なものですから、ここだけの話ということで私の思い出話を聞いてください。よろしくお願いいたします。

私はたった3年間ですが、前川先生の「死に水を取った」ということになるので、先生のお弟子さんたちにも非常に可愛がっていただきました。短い間でしたが、大変貴重な経験をさせていただきました。

私が前川先生に呼ばれたのは今から30年前、私が30歳のときでした。明治大学の大学院の歴史意匠研究室というところで、神代雄一郎(こうじろ・ゆういちろう,1922-2000)という建築評論家の研究室にいました。オーバードクターのようなかたちで、神代先生のお手伝いをしていたときに、前川先生の秘書として呼ばれたわけです。最晩年、前川先生はパーキンソン病になりまして歩き出すと止まらなくて、危なかったんですね。私が秘書になるずっと前に女性の秘書がいたことはあったようですが、外国に行かれ、長い間なかったそうで。いよいよ病気になったので自薦他薦いっぱいあったらしいですが、なぜか私が前川先生に雇われ秘書になりました。

そこからの3年間のことを書いたものを『建築ジャーナル』という雑誌に6回で連載させていただきました。この3年間は前川先生の真骨頂というか「戦う前川の3年間」だったんです。この連載をお弟子さんたちが読むと、「前川先生をすごく愛していたのね」とか、「涙がとまらないよ」というようなことを言われます。

前川先生との出会い

少し時代は遡るのですが、前川先生の東大の同級生に市浦健(いちうら・けん,1904-1981)という方がいます。戦後団地をたくさん計画した方で、私は大学院時代に彼を研究していて、日本の集合住宅はどうしてできたのかということをインタビューしていました。市浦先生が食道がんになって病院に入院したとき、市浦先生のお子さんがアメリカに行っていたこともあり、私は娘代わりといいますが、奥様と代わる代わる病院でお世話をしていたんです。そこに同級生の前川先生がお見舞いに来ました。そして、

「市浦、どうだ?」と聞くのです。市浦さんが「僕の内臓を検査したら若々しかったらしいんだよ」と言ったら、「僕だってこの間、四谷の事務所の前で車にぶつかったけれどもかすり傷ひとつせず、コートが切れただけだったよ」みたいな競い合いをしていましたね。帰るときに私が前川先生を玄関まで送っていたのですが、先生はパーキンソン病だったので、私は生意気にも「先生は杖をつかないんですか」と申し上げたら、私を見て「なんで僕が杖をつくのよー」と言うんですよ。それで入口までお送りして車でお帰りになりました。

そのあと市浦先生が亡くなり、国際文化会館で偲ぶ会をやるということになりました。前川先生にインタビューをして、その映像を偲ぶ会で流しましょう、ということになったので、私が市浦先生の息子さんと前川先生の事務所に行ったんです。だけど、前川先生は市浦先生のことを息子さんの前にも関わらず、あんまりよく言わないんですね。「市浦は晩年、演説が上手くなったな」と言うんです。前川先生も日本建築家協会の会長でしたし、市浦先生も同じく日本建築家協会の会長でしたから「建築家として、同級生として、ライバルではなかったんですか」と聞くと「何で市浦が建築家なんだよ」、「ライバルではない」というようなことを言うんですね。「じゃあ先生のライバルは誰ですか」と聞いたら「うーん、UF0かな」と言いました。そういう感じなんですよ、前川先生は。厳しいけれどユーモアがあって。それで仕方がないから、「市浦健を偲ぶ会」では市浦先生の一生をスライドにして流して、みなさんに楽しんでいただきました。その場にも、前川先生はニコニコとしてやってきましたね。昔の同級生って悪口を言いながらも仲が非常にいいんですね。

ユーモアと人間味ある人柄

前川先生は戦後、40歳で結婚しています。事務所に「窮鳥懷に飛び込む」と電報が届いて11歳年下の女性と結婚されました。

結婚が遅かったので、同級生たちは先にみんな家庭を持っているわけですが、人の家へ「かみさんいるか」と勝手に入って、ご主人がいなくても平気な様子でご飯を食べて帰っていたらしいです。市浦さんのところや、前川の事務所の下に事務所があった、構造家の横山不学(よこやま・ふがく,1902-1989)さんのところに行っていたそうです。とにかく同級生の家を我が物顔で歩いていたようで、でもなんというか憎めない人という感じだったそうです。それで40歳でご結婚なさって、私には「いやあ女はやっかいだね」が口癖でした。

市浦先生が亡くなってからしばらくして、前川先生に市浦事務所の所長夫妻と小川軒でご飯をご馳走になって、「秘書にならないか」という話をされました。後日、前川事務所に行きまして、詳しい話を聞いたら、「君は歴史を勉強しているそうだけれども、市浦を研究するより僕を研究した方がいいぞ」と言われましたね。それから「実は奥様が癌である」ということを聞きました。前川先生はお子さんがいま

せんから、奥様とふたりきりです。「君は市浦の死に水を取ったんだから僕の死に水も取ってよ」と言われて、考える暇もなく秘書になることになりました。前川國男、78歳。私は30歳のときです。

前川先生はパーキンソン病だったので、私はとにかく手を添えて、どこへ行くにも二人三脚でした。そうすると、先生の所作はフランス仕込みなのでエスコートをしようとするんです。私が支えていないと動けないのに、左手のひじをずっと上げて、エスコートします、というかたちで差し出すんですよ。それを私が持つような感じでどっちがどっちを支えているのか、おかしかったですね。それから例えば紅茶を飲むとき、手が震えるのに、小指を上げて飲むんです。「先生グッと4本の指で握って飲んでください」と言っても、どうしても小指が上がってしまう。そういう感じで非常におしゃれでしたし、スタイリッシュ、格好がよかったです。最初はそんなに格好つけなくても、と思っていたんですけど、先生は、明治の男子なのです。側にいるだけでエスコートしますという気持ちが伝わってきて、私の女性性が発揮されましたね。喫茶店に入っても「君好きなもの取りなさい」と言って、女の人をかばってやろうとするところがあるんです。だから私も、自然とちょっと下がってものを言うようになりますね。生意気を言うと、「生意気言うな」ってパッと言われますから。だけど非常に率直で、嫌味のない方でした。私は連載のタイトルに「大将の器」と書きましたけれど、大将ってこういう人のことかなという感じがします。

働き始めてから、「私は何の仕事をするんですか」と聞くと「君の仕事は」と言ってコスト表を出すんですね。左側にプロジェクト名が書いてあって右側の上にスケジュールが書いてあって、日付と設計料と残金がずっと書いてあります。「君、これを見て必要以上に使っているプロジェクトについては僕に警告してほしい」と言われました。でもそうは言われたものの、そんな警告をした覚えがひとつもないですね。

前川事務所は新宿区四谷に昭和29年(1954年)、ビルを建てました。そのビルの下の階に柳宗理(やなぎ・そうり,1915-2011)先生がいて、その隣に東京都写真美術館の初代館長であり、写真家の渡辺義雄(わたなべ・よしお,1907-2000)先生、2階に行くと東大の同級生で構造設計家の横山不学先生、そして3階に前川先生がいました。まるで博物館みたいな事務所で、みなさん明治の男でそれぞれに魅力がありました。

先生は、ユーモアがあって、非常に人間味があり、なにか、事務所で困ったことが起こると、皆で考える、というような風潮がありました。だから、事務所の所員にはヒエラルキーがないんですね。前川先生の名刺には肩書きがなく、正面に「前川國男」、裏に住所しかありません。「建築家」ってみんな書くでしょう。前川先生は「どうして書くのかね。職業は第三者が決めるものなのに」と言っていました。自分から名乗るものではないということなんです。所内も、主任だとか部長だとか肩書きが一切ありません。ただそうすると、所員は現場などで困らしくて、「先生肩書きをつけてください」と言っていました、「何で肩書きがいるのよ」と話になりません。密かにつけて仕事をしていたようではありますが。

前川事務所には、「前川國男建築設計事務所」と「前川建築設計事務所」、つまり「國男」の名前があるものとないものがあるんです。事務所に入って5年目までの方は、「前川國男建築設計事務所」に所属し、6年目になると「前川建築設計事務所」に所属するというシステムをとっていました。1975年までは前川國男建築設計事務所で、1976年から前川建築設計事務所が別で設立されました。前川先生は自分が亡くなったあと、前川事務所の行く末ではなく、前川事務所が建てた建築の行く末がどうなるかということを非常に心配しておりまして、何度も所内で議論をしていたようです。

事務所の所員がプロジェクトで困ったことがあると前川先生と直でお話をするんですね。「このプロジェクトで今こんなことが困っているから、先生に聞いてもらいたい」ということがあるんです。そうすると先生は「ふーん」と聞いていて、最後にその人に「君みたいなやつだけでも困るよ」と言うんです。そして私に「佐藤くん、誰誰を呼んで」と、その困っていると話題になっている人を呼びます。そして「最近の仕事はどう」と聞くんですね。色々な仕事について話すうちに、結局問題があることは本人が話すんですよ。「今こんなことで困っているんです」と。「それは困ったね」と、「なんとかしなきゃダメでしょう」というようなことを言って、それを再認識させるという感じでした。

非常に老獪(ろうかい)なやり方だなとも思ったのですが、要するにこれが大将のやり方なんですね。人が言ったことをそのまま鵜呑みにしません。伝聞を信じないのです。「君こういうことをやっているんじゃないの」ということを絶対に言わず、本人から言わせるんです。調べてみたら、前川先生の母方の親戚に白状させるのが非常にうまい警察官が昔いたと聞いて、なるほどこれはDNAかと思ったんですけど。人を非難するということは絶対にせず、本人に聞いて、対等に話す。それでみなさん先生のこと、自分の大将だという風に思うみたいなんです。実際、事務所の中で古い人たちも先生のことを「大将」と呼んでいました。不二窯業の社長も「大将」と呼んでおられたし、現場の人たちも、前川先生と一緒にいれば、いい仕事ができる、という、そんな風でした。

建築家としての責任感と厳しさ

とはいえ、設計料についてはとても厳しくて、東京都の管理している建築設計料一覧のきつとトップに前川事務所の名前があったと聞いています。だから、前川事務所の仕事の後に仕事をした設計事務所からは、「前川さんの後の仕事のときは、おかげさまで設計料がとても良いです」というのを何度も聞いたことがあります。その代わりそれに対する責任は強く持っていて、日本建築家協会(1965年設立)をつくったのも、きちんと設計料が取れるような集団になりたいからだと言っていました。日本には、建築家法という法律がありません。ヨーロッパやアメリカには建築家法があります。つまり、「建築家」という

職業が、「医者」や「弁護士」のようにきちんと独立した職能として認められているのです。一方で日本において建築士はエンジニアの一種として位置づけられ、いわゆる企業に「雇われる」という姿が想定されているんですね。建築家はクライアントの財産を守るための仕事ですから、きちんと設計料をもらうことをしなければいけない。そうした使命に基づいて、日本建築家協会をつくりました。

ところが新聞等でおなじみのように、設計料をダンピングして仕事を取るということがあります。前川先生はそれについては甚だ反対でした。先生の弟子も含めて「入札をしない会」というのをつくって入札には一切応じませんでした。ところがひとりの所員が間違えて、入札にならないような途方もない金額を書いて、入札に落ちるようにするはずを、ゼロの数をひとつ少なく書いて、入札に当たってしまいました。周りで非常に問題になりまして、前川事務所から出たOBの方々からも、「先生、前川事務所が入札入りました。これはいかなものでしょうか」と。その方を怒るわけでもなく、入札を辞退したということでは済んだようですが、家へ帰るときに青山墓地を通るように運転手に命じ、満開の桜を眺めながら「困ったもんだね」とつぶやいていたことを覚えています。誰かを責めることはしないで、自分の中で収めているようでした。

一度、ずっとやっていた民間の仕事を安い設計料で取ってしまいました。そうしましたら前川先生は、緊急で図書館に全所員を呼び出して「僕の建築について」を話し出しました。それはぐるぐると同じような話になるんですけど、要するに先生は、建築に「永遠性」を求めている。「自分が生きている間に自分の建築を壊してまた建てるようなことはしたくない。建てるのであれば、自分の寿命より長く生きられるものをつくりたい」と言っていました。そう言われた後に、なんと安い設計料で受注した前川事務所の執行部の4、5名をクビにしまいました。執行部が「先生、僕たちは建築家として認めてもらえないんでしょうか」と言ったら、「僕の口からそんなことを言わせるの」と言うんです。なかなか厳しいですね。

「武士は食わねど高楊枝」という言葉を思い出しますが、取るところは取るけれど拝金主義者ではありませんし、お金を儲けて何とかという感じではありません。最晩年に金庫を開けて、通帳を私に見せて、「残金いくらあるか数えて」と言われたので確認したんですが、私にとっては大金ですけど大したお金じゃないですよ。物欲があるとかそういう方ではなくて、きちんと所員に払おうとしていました。何かプロジェクトでお金を儲けたら、余ったところはそのプロジェクトにボーナスで出すんです。スケッチ、いわゆる核になる部分は全部自分で描いて方針を決めるんですが、他の所員が提案をして、「君のを採用しよう」となったときには、その人にちゃんとボーナスを出しています。加えて、「君の名前で発表しなさい」と言って、非常に個人を尊重していました。ただ昨今流行っているように、所員みんなにアイディアを出させようということとはしない。ご自分で密かに考える方でした。

戦う前川の3年間―①東京海上火災ビル

私が建築ジャーナルに「戦う前川」として書いた話を読んだ人が「涙がちょちょぎれる(笑)」と言うのは、戦う前川を私が見たからです。3回ほど大きな事件がありました。

お堀端に、東京海上火災(現・東京海上日動)ビルがありますよね。あれは前川先生が最初ツインで2棟建てることを計画していたんです。ところが色々な事情があって、1棟だけ建ち、あとの1棟は手つかずになりました。その当時、周りの建物は31mの高さで揃っていましたから、先生の当初案・127mは美観論争という議論を巻き起こしました。最終的に前川先生のツインタワー構想は取りやめになり、高さを100mと少し低くし、1棟のみ建てることになったんです。

その後、東京海上火災の残りのビルの片方を、三菱地所設計が建て替えることになる、それを聞きつけて先生は設計を始めます。いつも午後1時頃に事務所にやってくるんですが、夕方4時頃にならないと来ない日がありました。運転手さんが言うには、東京海上火災の前をぐるぐる回って、ずっと車の中で見ていたらしいです。そしてあるとき、三菱地所設計に代案を出すと言うんです。当初、提案したのはツインタワーでしたけれど、それを低層にして、下側にレストランや映画館を入れて、先生が一番好きだったお堀の風景を見ながらご飯を食べられるレストランにしようという新しいアイデアを描きました。その図面ができあがったら「佐藤君、東京海上火災の社長に電話して」と言うんです。それで電話して「前川が会いたがっています」と言って、その図面を持って、東京海上火災に行きました。

私と先生ともうひとりの役員とで行って、東京海上火災の最上階にある、皇居がよく見渡せる応接室に通されました。前川先生はこのために来たということは一切言わないんですね。先方の社長代理として現れた不動産部長もわかっているらしく、あいさつの後、何も言わないんです。とにかくじっとして、なんと、この沈黙が1時間続きました。そろそろいいかなと私は思い、タオルを投げて「先生そろそろ時間ではありませんかね」と言ったら「そうだな」と言って立ち上がって、図面の筒を置いて、隣のビルの解体後の現場を最上階から見て、帰ってきました。

後日、東京海上火災の社長を含めて役員3人が事務所へやってきて、前川先生と面談しました。その図面を見て「ありがとうございました」と礼を言い、先生に向かって「私たちはサラリーマン社長でございます」と。「役員会で決まったことを我々だけでは覆すことができません」と言って、平身低頭謝ってお帰りにになりました。先生としては、今の僕はこういう案だというのを出さなければ、仕方がなかったという感じだったと思います。それが戦い続けることになった3年間の第一歩でした。

戦う前川の3年間―②東京芸術劇場

その次に、東京芸術劇場があります。東京芸術劇場の設計者を選ぶ審査員10人は、5人が有識者と呼ばれる文化人で、5人が役人でした。設計者候補として最後に芦原義信(あしわら・よしのぶ,1918-2003)先生と、前川先生のふたりが残って、5人の文化人は前川國男、5人の役人は芦原義信ということで票が分かれて、頑として動かなかったそうです。それを知らせに来た方に、前川先生が「芦原君と僕と、ホールに対する考え方がどう違うかをヒアリングしてください」と言ったんです。そのように東京都側に伝えたら、東京都から「前川國男の診断書を出せ」と言われました。要するに、先生はパーキンソン病でしたから、「建物が完成するまでに生きていますか」と問われたわけです。仕方がないから虎ノ門病院にふたりで行って、診断書を東京都に出しました。

前川先生はホールが好きでいろいろ勉強なさっていて、「おにぎり型」のスタイルでやりたかったんです。それをごちゃごちゃスケッチして、事務所の所員に「形にしてちょうだい」と言うのですね。池袋の駅から公園、プロムナードがこうなってホールがこうだというのを描いて、それを所員が形にして、東京都に出しました。ただ最後に有識者のひとりが白票を出しまして、4対5になり、芦原先生に決まりました。

そういうことで芦原先生に決まったあとに、東京都が前川先生に東京都名誉市民賞を出すということになったんですね。それを聞いて先生は「そんなものはいらない」と言いました。実は日本芸術院賞をもっているんですね。ただ、10年間ノミネートされたにもかかわらず、芸術院会員にはなれなかったというのが有名な話らしいんですが。どうしてかと聞いたら、審査員に付け届けをしていないということを言われまして。秘書の心得としてそういうことをしないといけないそうなんです。先生はそういうことに全然こだわっていませんでした。

前川國男の弟というのが、第24代日本銀行総裁の前川春雄です。前川春雄さんはご本人も勲一等を断っているんですけど、前川先生が亡くなったあとに、先生に勲三等か何か came ときも「三等とは何事か、人に順番をつけるとはけしからん」と断りました。そういう前川家の気質というのがありました。

前川先生のお父様が滋賀県の彦根の方で、彦根藩の奨学金をもらって東京帝国大学(現・東京大学)の工学部に入って土木建築をやっていた方なのですが、同級生に言わせると古武士のような人だったらしいですね。お母様は、さっきの警察官の親戚の方もいらして、東北の方で金持ちだったこともあって、クリスチャンではないけれど、洋菓子をつくったり、洋物を取り入れたり、弘前のキリスト教の文化を受けていたようで、進取の気性に富んだモダンな方だったようです。先生は「あれは今でいう教育ママだね」と言っていましたけど。本郷に住んでいた頃に、学校へ通う道の北風が強くて、子供たちに風が当たってはいけなからと別の学校に転校させたということもあったらしくて、いろいろなことに口を出してきたようです。ご両親は40歳まで前川先生が結婚しなかったことを心配して、「なぜ國男は結婚しないのでしょう」と同級生に聞き回ったこともあるとか。とにかくお父様は古武士のようで、お母様は教育ママでした。それでお父様の方が好きだったと、先生は言っています。

そういうわけで、東京都は前川先生が東京芸術劇場を取れなかったので、名誉市民をあげようと思います。一度は断ったのですが、行きがかり上いただくことになりました。私は常に先生の横に付いていますから、なんでも聞こえてしまうのですが、表彰状をもらうときに先生は「こんなことで済まされないぞ」と当時の鈴木都知事に言いました。そういう風に、とにかく何かあるときはトップに向かって直訴します。影で根回しするとか戦略を練るということは全くなかったです。

戦う前川の3年間—③東京都庁舎

それから、東京都庁舎の指名コンペにも6人の中のひとりとして、選ばれていました。旧都庁舎のところで、6社に向かってご説明会というのがあったんですね。各社の人縦一列に並んで、一番偉い人が前に来ます。先生が一番前に座って、私が横にいました。所長が来ているのは、前川國男だけなんですよね。前川國男が説明を聞いて、旧都庁舎を見学して、新しい都庁舎をつくる計画を聞きます。見学をしていると、途中から丹下先生がやってきました。前川事務所は前川國男が来ているのに、丹下事務所は丹下健三が来ていないのはおかしい、と思ったらしいです。丹下先生が旧都庁舎の避雷針のある屋上に登る壁沿いのはしごを、さっさと目の前で手を使って登っていくと、前川先生もパーキンソン病なのに自分も登る、と言って手を離さないわけです。なんとか登らないでもらいましたが、丹下先生に対してライバル心がむき出しでした。

先生は事務所に帰ってきて、新都庁舎の設計をやっているチームの様子を見て、部屋に戻ってきたら「うちのチームは負けだね」と言いました。新都庁舎のチームの案をあまり認めていなくて、あれは負けだと言うんです。

そんなことをしているうちに、NHKから東京都庁舎のコンペに参加している6社を訪ねるという取材が来ました。前川先生と担当者が隣に座ってNHKのインタビュアーが「前川事務所の21世紀に向けたオフィスはどういうものでしょうか」と質問して、担当者がとうとうと話したのですが、先生は隣で寝てしまったんですよ。その様子を見てNHKのプロデューサーが私に「前川先生はもうお年でしょうか」と聞くんです。先生にはお考えがあるので、もう1回今度は先生ひとりに聞いてください」と言ったんです。カメラが回って、もう一度同じ質問を聞かれると、先生は「うちの事務所にそういうものはありません。昨日より今日、今日より明日いいものを作るだけ。それだけしか考えていません」と言いました。いただいたコンペの要項は、黒川紀章(くろかわ・きしょう,1934-2007)先生がつくっていたんですが、3つの敷地に何を入れるかボリュームが決まっているんですね。「何を入れるかを定めるだけの、建築家の腕の振るいようなコンペだ」とカメラの前で言いました。素晴らしいでしょう。そしたらNHKはポーズだけで、撮影をしていませんでした。放映されたものを見たら、他の方のインタビューだけで前川事務所のインタビューはなしでしたけれども。そういう感じで、最後まで核心をついていて、直球ど真ん中。そういう感じ

の方でした。

事務所みんなが作業しているところへ前川先生が行って、「君今何やっているの」と言うとその席の人が立ち上がって、前川先生に席を譲るんです。じっと凶面を見て、先生がその人と会話をするとみんなが集まってきて、「前川國男が何を言うかな」という風になっているわけですね。「新しい21世紀に向けて」とか机上の空論みたいなのは全然認めません。説得されれば「君の案で行けば」と免許皆伝となるんですが、そうでないものは全然気に入らないんですよ。平面のプランを大切にしていたから、無意味な装飾的なものが描いてあると赤鉛筆でバツテンを付けます。みんなバツテンをもらわないように、一生懸命考えていました。ただ東京都庁舎のコンペはそんな感じで、見事に落ちるわけです。

最晩年たった3年ですけど、東京海上火災、東京芸術劇場、東京都庁舎の案件がありました。だから先生はずっと一生懸命考えていました。

私が入所するとき、とにかく事務所の経理の人と先生だけが私を決めて、あとは誰にも言わないんです。私は1ヶ月以上誰にも紹介されずに秘書室に座っていました。ちょうど事務所の記念日か何かがあって、そこで初めて秘書として紹介されました。今では非常によく理解できます。私と一緒にだからといって、特別にみんなにどうのこうのという話ではなくて、自分のそばにいてくれればいい、力強い杖であればいいという感じで思っていたようです。「先生は杖をつかないんですか」と市浦先生のところにいらしたときに聞きましたから、そういう力強い大木の杖のような存在で隣にいました。ヘルパーさんみたいなものですね。ただ私はあまり驚いたり、人にキャーキャーと言ったりしないので、「東京海上火災の社長に電話しろ」と言われたら、言われた通りにやるわけです。都知事に何か言っているけど「そんなもんか」と思っていて。ちょっと間が抜けていたかもしれませんが、それがちょうど良かったのかもしれない。

最晩年の前川國男

その間、奥様が入院なさって亡くなりました。

奥様が倒れて、最後はがんですから何も食べられなくなりました。東京芸術劇場は先生の悲願だったと思うんです。東京文化会館をつくったあとに、東京都はもうひとつコンペ案件を持っていることを知っていましたから、それをずっとつくりたいと思っていたんだと思います。そんなことを奥様と話をしていたのですね。もうほとんど意識のない寝たきりの奥様に「芸術劇場取れたよ」と言うんですよ。そうしたら奥様が何も言わず手を振りました。冥土の土産にいい話をしやりたかったのかなと思います。

奥様の容態が今日山だというときに、先生は病院に残らず、帰ると言うんですね。そのときには冷たいもんだなと思っていたのですが、後に、お葬式などが終わって事務所でお茶を出していたら、真っ赤

な顔をして「うっうっ」となるんです。パーキンソン病だから喉が詰まったのかしらと思って「先生大丈夫ですか」と尋ねると、「泣いているんだよ」と言うんです。奥様のことを思い出して泣いていたんですね。そういう方です。

病院に行ってまだ奥様が歩ける頃、玄関まで送ってきた奥様が「あなた、お手洗いに入っていらっしゃって」と言いました。そうしたら、「はい」と言って、お手洗いにただ入ってじっと立って時間をつぶして出ていくんです。奥様の気持ちが収まればいいわけですから、そこで「行かない」とは決して言わないんです。私が「そうか」と思っていると「女はやっかいだね」と言うんですよ。最後に奥様が亡くなったあとに、「僕はもうやる事がなくなったよ」と言っていました。「大切な方が亡くなるということは、自分でもなくなるということ」なんだなあ、というのが以後、私の死生観になりました。

千駄ヶ谷の仙寿院にお墓があります。彦根に先祖の墓があるのですが、遠くてなかなか行けないから東京につくるということで、仙寿院に土地を求めました。当初は弟の前川春雄さんと隣合わせでお揃いの墓をつくるということを考えていたのですが「三代先は隣同士ともいっても他人です、今から一緒におつくりになったらいかがですか」とご住職に言われて、前川家の墓としてひとつにしました。前川事務所で私が唯一図面を描いたのは前川家の墓です。最初は5匹の飼い犬のために五輪の供養塔を建てることを考えていましたが、結局、今のプランに落ち着きました。前川先生はパーキンソン病でしたから、漫画のおでんみたいなスケッチを描いて、それを私が図面にして。丸いゴロタ石が好きなので、墓のまわりに敷き詰めて。奥様の骨を納めたら、「僕がやることは終わったね」と言いました。

それでも先生は「こうはしてられない」と、すぐに立ち上がって何かをしようとします。私が先生を午後1時に迎えてお茶を出すんですが、私がお茶を持っていく間に、自分で立とうとするらしいんですね。右半身に床の絨毯の毛がついていて「先生どうしたんですか」と言うと「なんでもない」と言って座っています。どうも自分で立ち上がろうとして、倒れたらしいんです。でも平気でまた元に戻って座っているみたいなことが何度もありました。

土曜日のあるとき私の家に電話がかかってきて、救急車で運ばれたと連絡がありました。事務所の3階から2階に下りる、吹き抜けのある先生の仕事部屋の階段の途中から落ちたらしいんですね。頭を打って、病院に救急車で運ばれたということでした。私が行きましたら、「お、来たか」と言って、「僕はね、子供の頃柔道をやってたから受け身が得意でこの程度で済んだよ」と言うのでおかしかったですね。事務所も自宅も床は絨毯になっていますから、どう転んでも怖くはないのですが、先生は電話を取ろうと思って転んで、そのまま寝ながら喋っていたりするんですよ。なんだかとってもユーモアがあっておかしかったです。いつもふたりで笑っていました。

「晩年は無口になりましたね」とみなさんおっしゃいますが、お仲間の未亡人たちの集まりでみんなを笑わせるようなことを言うなど、非常にユーモアのある方でした。「僕は何しろフランス仕込みだから」なんていう感じで、すごく洒落ていました。きちんとしたネクタイをして、ジャケットを着て、スーツ姿でいて、私も歳をとったらこんなに綺麗にしていなくちゃいけないなと思いました。パーキンソン病だった

ので、私が靴を運動靴にしたんですけれど、「ミッキーマウスの靴みたいだよ」と言うんです。晩年は無口になったと言われますが、私との会話ではとても面白いことを言っていましたよ。

動物も好きでした。流政之先生と親しかった女性がつくってくださった雀が遊んでいる版画があるんですけど、それを事務所に置いてじっと見ながら「可愛いね」と言って、いつも眺めていました。また所員に対しても、あいさつの声からなのか、「あの子はいいい子だね」と言うなど、非常に微笑ましいというか、嫌なことを言わない方でした。たった3年間でしたが、この経験はありがたいと思っています。

それ以降の日本の建築界は、実力だけではない競争をしているようなところがあるので、前川先生には生きにくかったのかなという風に思います。個人主義者というか近代人でしたから、きちんとした実力で戦いたいと思っていたようなんですけれど、昨今の日本社会にはなかなか馴染めなかったかもしれませんね。でもそれを貫き通したので、みんなに「大将、大将」と慕われました。はっきり物事を言う方でしたけど、いやなことを言ったことはないと思うんですね。そういう感じで、とても素晴らしい3年間でした。



質問1 前川先生と奥様はどういう感じのご夫婦だったのかということを、もう少しお話をいただけたらと思います。

佐藤さん 長い前川事務所の歴史の中で、住宅建築は女性、公共建築は男性が主に担当していました。

先生は実際、住宅の建築は苦手だったと思います。奥様は新しい自宅について色々文句があったようで、お勝手周りが悪いとか、それを聞かされるのがたまらなく面倒くさかったみたいです。だから「女はやっかいだね」とおっしゃっていましたね。明治生まれの典型的なご夫妻で、男子は外で働いて女子は家庭を守るという感じですね。私が知っているときはもう奥様が病気を患っていたのですが、古いアルバムを見ると犬を複数抱えてジャガーに乗ってドライブしているとかそういう写真がありますから、いたって円満なご夫妻じゃないですか。みなさんもそうだと思うんですけど、家って記憶が残っていますよね。亡くなったあとに、お家に着くと奥様が生きていると錯覚し、「みよ、みよ」と奥様の名前を呼ぶんですよ。それで自分ではっと気がつく。それがちょっと切なかったです。「帰ったよ」という合図代わりにいつもこうやって奥様を呼んでいたのかな、と思いましたね。

質問2

『前川國男・弟子たちは語る』（建築資料研究社,2006）という本の中で、坂田泉さんが「ル・コルビュジェの封印」というタイトルで書いていらっしゃるんですけど、最初はコルビュジェを目指していかれた前川さんは、晩年コルビュジェに対しての心境の変化というのはありましたか。

佐藤さん

だいたい東京文化会館が60歳ちょっとぐらいだったと思うんですけど、私には「60歳でコルビュジェから抜けて、70歳で自分自身ができて、80歳で死ぬんだね」という風に言っていました。先生は「建築は大地に根ざしている」と言っていて、その点を大切にしていたので、気候風土、その土地の環境にあったものをきちんとつくらなくてはと思っていたようです。ですからコルビュジェの活躍した環境から帰ってきて、40歳で事務所をつくるわけですから、20年間目指してきたけれど、自分らしい打ち込みタイルの姿になっていくんですね。歳をとると見えてくるものがあって、憧れと現実というところで調和がとれるのかなと思っています。

それから私も歴史を勉強していて、40歳までつくれなかったというのはとても大事なかなと思っています。日本は右肩上がり時代で、世界中のいろんな建築家が活躍できるチャンスが多いですが、その分若気の至りというような作品もあるでしょう。たとえば、昭和の初期に『負ければ賊軍』という論文を書いています。上野の帝国博物館（現、東京国立博物館）のコンペで、要件になっていた帝冠様式をまったく否定した案を提案しています。実際には、私には、「あれが建ったら、上野の山は歩けなかったよ」と言っておられました。前川先生はそれなりのキャリアを持って建築をつくりたいという風に思っていたので、40歳から戦後ということが非常に大事なかなと思っています。つくらないできちんと考える時間というものが、建築家として必要だったのではないですかね。

この間も熊本に用事があって行きましたけれど、熊本県立美術館はとても良いです。市民

の方に「あれは好きです」と言われますし、前川建築がいくつかある青森県の弘前市でもそう言われます。そうした建築を流行だけでつくっていないのは、40歳までつくれなかった自分というものがあつたからではないかと思っています。

質問3

柳宗理さんと同じ事務所にいたということで、柳さんとの交流も実際にあったのでしょうか。

佐藤さん

柳先生は昭和29年(1954年)にあの建物ができるときに、地下室にアトリエをつくります。自然光の入る地下室に柳先生の部屋がありました。柳先生は前川先生が先生なんですけれど、おいでよと言われたのに一度も仕事をしたことがないと怒っていました。呼ばれたから仕事くれるかなと思ったらなかったようです。いつも会えば挨拶もしてますし、柳先生は前川先生を尊敬していました。柳事務所は自分でお昼をつくるんですが、にんにくが好きでにんにくの香りが前川先生のところまで届くと、「あいつまた昼飯作りやがって」と先生が言う、という感じでしたね。私が前川先生の身体を支えていると、柳先生が「僕もやってね。僕が歳をとったら秘書になってね」と言っていました。でも奥様が立派ですから、私が出て行かなくても大丈夫でしたけれどもね。

質問4

いろいろな本を読みますと、前川先生は大変芸術が好きだったということがわかるのですが、最晩年の頃も音楽をお聴きになっていたのでしょうか。

佐藤さん

最晩年は忙しくて余裕がないんですけど、東京文化会館や神奈川県立音楽堂にはよく行きましたね。肉声、人間の声が好きで、素晴らしい楽器だと言っていました。特に誰が好きという話はしませんでした。先生は自分の建築に足を運ぶのが好きでした。東京文化会館や神奈川県立音楽堂で演奏があっても、天井を見ているんです。でもキッキッと耳が動くので、聴いているのかなと思いましたね。ただパーキンソン病だと、鼻息が荒くなって、いびきのような音がしてしまうので、音楽を聴いている周りの方々にご迷惑になるんですよね。先生ご本人もわかっていて、ちょっと遠慮がちになっていました。

だけど音楽は好きです。特に昔は事務所の部屋にレコードプレーヤーがあつて、ひとりで音楽を聴いていたようです。晩年も車に乗って四谷から自宅へ帰る間に看板が目に入ると、そのコマーシャルの歌を歌いだすんですね。そういう意味で音楽好きだと思います。でも、オペラを熱唱したのは聴いたことがないです。自宅の地下室には立派な音響ルームがありましたが。

それから、くいしんぼう。銀座の九兵衛のお寿司が大好き。ある会議でなだ万のお弁当が出るのです。会議後なので、食べないで帰る方もいるのですが、先生は食べようとする。でもやっぱり食べようとして、入れ歯が落ちてきてしまう。だから、二人羽織のような状態で食

べさせるわけです。「歯が落ちそうなのでやめてください」と言っても、ダメです。食べようとします。非常にくいしんぼうです。

若い頃はたくさんオペラも聞きに行っていたそうで、「上野のホームでひとりで大きな声で歌っている人がいて、誰かなと思うと前川さんだった」という話はよく聞きますよ。所員も順々に連れて行ってもらったそうです。

〔編集〕 福井尚子 〔編集協力〕 米津いつか（ノマドプロダクション） 〔デザイン〕 安藤次朗